第6章　結　語

（1）薬師寺食堂の建築

食堂の遺構　食堂は桁行11間、梁行４間で、建物の総長を含む柱間寸法は確定できないものの、『薬師寺報告』で検討している薬師寺の基準尺（１尺＝0.296m）を用いれば、建物総長は桁行41.4m（140尺）、梁行16.0m（54尺）の復元案Ａ、桁行40.7m（137.5尺）、梁行16.0m（54尺）の復元案Ｂが考えられた。復元案Ａは『薬師寺報告』が推定する規模で、『縁起』の記載「長十四丈、広五丈四尺五寸」、すなわち桁行140尺、梁行54.5尺に近似する。柱間寸法は、いずれの場合でも、梁行は中央２間（身舎）が4.3m（14.5尺）、両脇間（廂）が3.7m（12.5尺）とみられるが、桁行は、中央間を復元案Ａでは4.4m（15尺）、復元案Ｂでは3.7m（12.5尺）とする点が異なり、その他の桁行柱間は3.7m（12.5尺）となる。

基壇規模は地覆石あるいはその抜取溝の外面間で、東西47.1m（159.1尺）、南北21.6m（73.0尺）を測り、南面中央階段から得られる南北中軸線からの東西基壇縁までの距離は、西半が東半よりも50cm程度大きい。基壇地覆石の外側には幅95～100cmの石敷（地覆石外縁から雨落溝側石内縁まで）があり、さらにその外側に側石の内法が50cmの石組雨落溝がめぐる。東西北面の雨落溝は、今回の調査では検出できなかったが、既往の調査成果がある。ただし東面ではその位置が明確でない。以上から、側柱心から地覆石外縁までの基壇の出、および側柱心から雨落溝心までの軒の出は、南北面でそれぞれ2.8m（9.5尺）、4.0m（13.3尺）、西面では基壇の出が復元案Ａでは3.1m（10.5尺）、復元案Ｂでは3.5m（11.8尺）、また西面の軒の出は復元案Ａでは4.4m（14.9尺）、復元案Ｂでは4.8m（16.2尺）となる。これらから、軒の出は最小値が南北面の4.0m（13.3尺）、最大値が復元案Ｂの西面で4.8m（16.2尺）となる。最大値をとる復元案Ｂの16.2尺は、後述する三手先組物を用いても、柱間寸法に比してやや大きすぎる感がある。

類例との比較　古代寺院の食堂の類例としては、資財帳などの文献資料から知られるものと、発掘調査で明らかになった遺構とがある（第２表）。金堂や塔、講堂、門以外で、比較的規模の大きな建物や廂付きの建物を検出した場合、これを食堂に比定する発掘事例もある。ただし、甲賀寺（第１次近江国分寺）や百済寺のように伽藍全体の位置関係から比定できる遺構のほか、たとえば比定建物の周囲から炭や焼土、土器が多数出土した伊勢国分寺のような遺構を除けば、規模や廂付属以外の積極的な根拠を欠く場合も少なくない。ただし、伊勢国分寺の場合も食堂院を構成する建物であることは間違いないと思われるが、食堂そのものである確証に欠く。

伽藍配置上の位置も、講堂の背後に置く場合（薬師寺・元興寺・百済寺・西寺・四天王寺）と、伽藍中軸線からずれて置く場合（東大寺・大安寺・興福寺・西大寺・西隆寺・甲賀寺）とがあり、後者は食堂院を形成する場合もある。また、法隆寺のように食堂が講堂を兼用すると考えられる場合もあって、伽藍における食堂の定点がないこともその比定を困難にしている要因であろう。石山寺では紫香楽にあった掘立柱による藤原豊成の邸宅を食堂として移築していることが正倉院文書に見え、食堂が掘立柱建物である可能性も否定できない。以上の要因のため、確実な食堂の類例はごく少ない。

なお、古代食堂の現存建築は、これも確実なものはない。現存する法隆寺食堂は、資財帳（第２表文献７）に現れる政屋と規模が近似することから、当初から食堂として用いられたものではない可能性が指摘されている。また、新薬師寺本堂も伽藍地の東方に位置し、身舎梁行を３間とすることなどから、当初は食堂だった可能性が指摘されているが、これも確定的でない。

さて、第２表の規模をみると、東大寺・元興寺が桁行11間で、柱間数としては薬師寺と同じであり、

第２表　古代寺院の食堂

寺院名	年代	規模（間）	総長（柱間寸法）単位：尺	基壇の出（尺）	基壇規模（尺）	基壇外装	屋根形式	軒の出（尺）	備考	文献
薬師寺	奈良市　８世紀前半	11×4	復元案Ａ：桁行140（12.5×5＋15＋12.5×5） 復元案Ｂ：桁行137.5（12.5×11） 梁行54（12.5＋14.5×2＋12.5）	9.5～11.8	159.1×73.0	切石積	寄棟？	13.3～16.2	薬師寺本『薬師寺縁起』に「東屋」とあり。	1
東大寺	奈良市　８世紀後半	11×6	柱間寸法不明	不明	不明	不明	不明	不明	天沼俊一が桁行196尺、梁行96尺に復元。	2～4
大安寺	奈良市　８世紀前半	不明	桁行145、梁行86 柱間寸法不明	不明	不明	不明	不明	不明		5
元興寺	奈良市　８世紀	11×4	不明	不明	不明	不明	不明	不明		6
法隆寺	斑鳩町　８世紀前半	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明		7
石山寺	大津市　８世紀後半	5×3＋２面廂	桁行102、梁行57	不明	不明	不明	切妻＋２面廂	6	掘立柱建物。紫香楽の藤原豊成板殿を移築。	8
興福寺	奈良市　８世紀前半	9×5	桁行120（11＋14×7＋11）、梁行58（11＋12×3＋11）	7.6～7.7	135.4×73.4（計算）	壇正積	寄棟？再建は入母屋	不明：7.7以上	延石検出。	9・10
西大寺	奈良市　８世紀後半	7×4	桁行110（15＋16×5＋15）、梁行60（15×4）	不明	不明（遺存せず）	不明	不明	不明	食堂遺構は一部判明。食堂院の様相が解明。	10・11
西隆寺	奈良市　８世紀後半	7×4	桁行70（10×7）、梁行40（10×4）	不明	不明	不明	切妻	不明	掘立柱建物２面廂→規模同じで礎石建物に建替。西大寺伽藍図の位置から食堂と推定。	12
甲賀寺	甲賀市　８世紀？	7？×4	桁行70？、梁行36（8＋10×2＋8）	不明	不明	不明	不明	不明	礎石遺存。	13
百済寺	枚方市　８世紀？	5×3	桁行50（10×5）、梁行26（8.5×2＋9）	7.5（計算）	65×41	瓦積	切妻	不明：7.5以上	礎石建物。講堂背後に位置。	14
西寺	京都市　９世紀	7×4	桁行102（13＋15×2＋16＋15×2＋13）、梁行52（13×4）	11.5	125×75（計算）	不明	入母屋or寄棟	不明：11.5以上		15
四天王寺	大阪市　９世紀か	7×4	桁行66？（8？＋10×5＋8？）、梁行不明、廂の出不明	不明	不明	瓦積	切妻	9	天徳焼失建物。	16

＊薬師寺をはじめ興福寺・西大寺は文献からも規模を知られるが発掘調査成果を記した。
＊このほか、食堂と推定される建物跡の発掘例に、上植木廃寺（伊勢崎市）、上淀廃寺（米子市）、雪野寺（滋賀県竜王町）、宮井廃寺（東近江市）、鳥坂寺（柏原市）、葛井寺（藤井寺市）のほか、伊勢・淡路・讃岐・豊後・日向の各国分寺等がある。

文献
1：本書（今回の発掘調査）
2：正倉院殿堂図
3：東大寺要録
4：天沼俊一1910「創建当時に於ける東大寺南大門、東西両塔院及び其沿革。附講堂、僧房、食堂」『建築雑誌』第283号
5：大安寺伽藍縁起并流記資財帳
6：「堂舎損色検録帳」『平安遺文』551号
7：法隆寺伽藍縁起并流記資財帳
8：関野 克1937「在信楽藤原豊成板殿考」『寶雲』第20冊
9：奈文研1959『興福寺　－食堂址の調査－』
10：奈良市教委1998『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』
11：奈文研2007『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告』
12：奈文研1993『西隆寺発掘調査報告書』
13：肥後和男1931『紫香楽宮趾の研究』滋賀県史蹟調査報告 第４冊
14：大阪府教委965『河内百済寺跡発掘調査概報』
15：鳥羽離宮跡調査研究所1977『史跡西寺跡』
16：大谷女子大学資料館1986『四天王寺　－食堂址－』

大安寺の桁行145尺も薬師寺と近似する寸法と言えるだろう。ただし大安寺は梁行が86尺あり、東大寺・興福寺では身舎梁行を３間以上にとっており、薬師寺の食堂はそれらに比して若干小さい。いずれにせよ、講堂に匹敵する規模をもつ寺内最大級の堂であることは、少なくとも文献から知られる奈良時代官寺の食堂の様相に合致すると言えるだろう。

発掘調査で基壇規模を含めた食堂の実態がよくわかっているのが、興福寺・百済寺・西寺である。ここではとくに基壇の出に注目すると、興福寺・百済寺が８尺程度であるのに対し、西寺では11.5尺ある。いずれも雨落溝を検出していないため、正確な軒の出は不明とせざるを得ないが、薬師寺では基壇の出が9.5～11.8尺であり、検出した雨落溝から軒の出は最小13.3尺、最大16.2尺と考えることができる。この最小の軒の出の寸法をとったとしても、柱上に手先をもつ組物を備えていたと考えて誤りなく、金堂や塔、講堂のような形式の三手先組物だった可能性も否定できない。興福寺の発掘成果から、食堂は講堂に比べて簡略な建物だったと考えられているが（第２表文献９）、西寺の例も基壇外の雨落溝まで軒が出ていたとすれば三手先組物を備えるような寸法になると思われ、建築的に見てもこれまで考えられている以上に、格の高い建物を想定できるだろう。これはあるいは講堂のすぐ背後に位置する、という伽藍配置が関係しているかもしれない。

食堂遺構の位置づけ　今回の発掘調査によって、柱間寸法の確定にはやや検討を必要とするものの、薬師寺食堂の建築的実態が判明した意義は大きい。少なくとも発掘調査で判明している食堂遺構では最大であり、雨落溝を備えていることにより、建物の実態を把握できるもっとも情報量の多い、きわめて重要な食堂の遺構であると言えるだろう。

（2）食堂の造営と廃絶

今回の調査では、これまで文献からはうかがうことができなかった、食堂の造営や廃絶に関する知見を得ることができた。さらに造営の具体的な工法等も判明し、古代寺院建築の基礎工法を知るうえで貴重な成果を得た。

食堂の造営と造営以前の様相　基壇版築や壺地業から出土した土器や瓦の年代はいずれも８世紀前半のもので、食堂は遅くとも奈良時代前半には造営が開始されたと考えられる。また基壇版築より下層で、地山（池沼堆積層）を埋め立てて平坦にする整地が調査区全域に施されていることを確認した。この整地には瓦片が含まれ、薬師寺の伽藍造営や整備が進んでいたことがわかる。この整地を掘り込んで石敷SX3065や石列SX3064が設けられており、食堂造営以前の一時期はこの整地土面が地表面だったとみられる。また、同じ面から掘立柱穴列SX3061～3063が切り込む。これらは基壇版築より下層にあるため部分的に確認したのみで詳細は明らかでないが、建物や塀になる可能性がある。これからも薬師寺伽藍が整備されていく過程で、食堂造営前になんらかの施設が建てられていたことが明らかになった。これまで薬師寺造営に関わる遺構は伽藍中心部では明らかになっておらず、南都の大寺においてもほとんど知られていない。その意味でも貴重な成果をもたらしたといえよう。

基壇築成の工程　食堂の基壇築成の工程は主として断面の観察から、以下のように復元できる。①先述した整地の上に、版築で基壇を築成する（１次版築）。この際、基壇の東部では緩やかな掘込地業をおこなっている可能性がある。②廂柱および身舎の妻側の礎石位置のみ大型の掘方を掘り、内部を版築で埋め戻す壺地業をおこなう。③壺地業の版築の途中で根石を入れ、上に礎石を据え付け、さらに壺地業内の版築をおこなう。④基壇上面まで土を積む（２次版築）。④妻以外の身舎の礎石位置に礎石据付掘方を掘り、礎石を据え付ける。これらの工程は複雑だが、壺地業や基壇版築に含まれる瓦はすべて薬師寺創建期のもので、一連の工程である。同様の工法は、薬師寺中門でも確認されている一方、講堂や金堂などは壺地業をせず、基壇築成の工程も建物によって違いがある。その理由は不明だが、建物の格、工人集団の技術、時期差等が反映している可能性を想定することができる。

食堂再建について　礎石据付掘方や礎石抜取穴に重複はなく、地覆石も一部据え直されているものの、全面的な改修は認められなかった。石敷や雨落溝にも顕著な改修は認められず、層状に積まれた精良な土の上に構築されており、奈良時代建立当初の形態をほぼとどめるとみられる。また、火災にともなう明確な焼土層もない。しかし、食堂の屋根に葺かれた瓦が落下したとみられる瓦溜まりSX3052から出土した瓦が平安時代中期のものでまとまっていることからも、食堂が天禄４年（973）の火災後、再建されたことは確実である。したがって天禄の火災後には清掃がなされ、寛弘２年（1005）に再建された食堂は創建時の規模や礎石位置を踏襲して建てられたとみられる。

食堂廃絶について　基壇を壊す大土坑SK3053・3054・3048に含まれる土器は、古代から中世までと幅広いが、その下限は13世紀末でこれまでに食堂が廃絶していたことは確実である。また、先述したように瓦溜まりSX3052出土瓦は平安中期のもので、軒瓦の組み合わせも判明し、一括性が高い。瓦は屋根に葺かれた後、長期間使用されると考えられるので、瓦の年代が直接廃絶年代を示すわけではないものの、SX3052のなかに後世の補修瓦を含まないことは注目できる。さらにSX3052下層からは11世紀末～12世紀頃の土師器皿が出土した。この土器が食堂の屋根から瓦が落下する直前に廃棄されたと考えると、食堂の廃絶は12世紀代であった可能性が高い。